



Title	『隆季集』の成立
Author(s)	三村, 晃功
Citation	語文. 1983, 41, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68702
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『隆季集』の成立

三 村 晃 功

土御門中納言藤原家成の男で、保元三年非參議從三位を経て、正一位・権大納言に至り、寿永元年出家。『久安百首』の作者に追加され、『詞花集』以下に「一首の入集をみる平安後期の歌人、藤原隆季（一二七〇没年不詳）に私家集があったらしいことは、福井久

藏氏が『大日本歌書綜覽中巻』（大正15・8）で、「隆季集 写一巻」集はものに見えたれど夙く佚したるか」と推定されていることによつて予想されるが、現在のところ、隆季の私家集は探し得ず、それとは趣を異にする私撰集が伝存している。彰考館文庫と井上宗雄氏の御所蔵にかかる『隆季集』が当該書で、本書はすでに、「中世私撰集解題（その一）」（『和歌文学研究』第十四号、昭和37・10）と『和歌文学大辞典』（昭和37・11）の当該項目に、井上宗雄氏（後者は森本元子氏と共同執筆）による簡にして要を得た紹介がなされている。

そこで、次に便宜上、「和歌文学大辞典」から当該記事を引用させ

ていただき、本稿の端緒にしたいと思う。

隆季集たかすえ 伝本は彰考館文庫に『匡衡集』と合綴の一冊があり、明応二1493・六中旬右京亮量胤の本をもつて写した由の

奥書がある田本。井上宗雄本も同系（文久三1863 みなもとのただなを書写）。春一四二、夏一〇一、秋六四、冬三三、釈教・神祇・歲暮・祝各一、恋二五、計三七〇首を収める。「隆季集」とは題するが、実は中世成立の私撰集で隆季の集ではない。平安・鎌倉時代の和歌を部類したものである。作者名・会記はすべて取り扱われている。

この井上・森本両氏の的確な記述によつて、『隆季集』の内容・成立の問題はほぼ明らかにされて、いまさら事新しく付加すべきことはあまりない。しかし、本書が「平安・鎌倉時代の和歌を部類した」撰集であることには違いないが、具体的にいかなる出典資料から、いかなる歌人の詠を採録しているのか、そして、本書はいかなる性格を有する撰集で、その撰集目的は何であったのかの言及は不可欠であろうし、また、本書が「中世成立の私撰集」には相違なかろうが、その成立時期はおおよそいつごろであるのかの検討も是非必要であろう。

かかる次第で、以下は井上氏らの成果に基づいた『隆季集』の出典資料の闡明をとおして成立の問題に言及した拙い報告であるが、大方の御叱正を賜わらば、幸甚である。

さて、『隆季集』の精査に入る前に、底本とした井上宗雄氏御所蔵の『隆季集』の書誌的説明をしておこう。本書は縦二二・七、横一六・一、一、一の袋綴写本一冊。表紙は朱色下地に鶴の模様を押す。題簽は左肩に「隆季集」。内題も同じく「隆季集」。本文料紙は楮紙で、一面一〇行書。歌一首一行書で、歌題は本文より五字下げ。遊紙はなく、墨付三六丁。一丁オに「宮崎藏書」「はなの屋」「堀田文庫」の旧藏印と、「井上宗雄藏書」の現藏印がある。巻末に、「右隆季集右京亮量胤之本全／備用写留者也／于時明応二年林鐘中旬／尚保在判」なる奥書（墨書）と、「諸家伝補仕云隆季權大納言正三位云々」なる注記（朱書）と、○系図修理大夫／顯季四代孫四條權人納言正三位藤原隆季母加賀守／高階宗章女／夫林抄ニ歌多々入レリなる注記（朱書）と、「文久三年十一月四日写之／みなもとのた／なを」なる識語（墨書）がある。参考館文庫本の転写本と推定される。

ところで、「隆季集」が隆季の詠を収めた私家集ではなく、他人の歌から成る私撰集である点については、たとえば、「浦のかすみ」の例歌（1）須摩のあまのこぼりし袖の浦波に春は霞のもしほたれつ（浦のかすみを）一四）（2）いく春の霞のしたに埋れておとろの道に跡をとぶらん（古今六帖）（同・一五）（3）雪消る萩のやけ原霞こめたてぬ煙にもゆる若草（同・一五）のうち、（1）が『俊成卿女集』の俊成女の詠、（2）が『拾遺愚草』の定家の詠、（3）が『正治再度百首』の長明の詠であることから明白であ

ろう。ここに、『隆季集』は私撰集であることが示唆され、『隆季集』の内容（性格）を把握する第一段階として、『隆季集』の収載歌の作者面からの検討が要請されよう。そこで、『隆季集』の収載歌三七〇首の典拠および作者を整理すると、次のとくなる。

〔草根集〕	20	21	25	29	30	44	63	70	82	84	87	88
〔林葉集〕	93	95	121	133	134	136	141	166	202	204	235	238
〔宋雅千首〕	254	270	274	277	319	327	339	349	204	237	238	240
〔肖柏千首〕	217	220	230	232	239	242	242	242	201	211	216	217
〔古今六帖〕	308	234	129	257	160	142	144	145	205	207	211	212
〔俊成卿女集〕	244	131	162	165	184	187	191	193	298	303	304	305
〔人麿〕	260	278	349	350	353	358	359	367	219	223	233	236
〔後成卿女集〕	175	176	176	176	176	176	176	176	180	180	180	180
〔人麿〕	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305	305
〔俊成卿女集〕	7	9	10	14	15	15	15	15	15	15	15	15
〔人麿〕	287	289	290	299	300	301	302	303	304	305	306	307
〔俊成卿女集〕	245	264	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278
〔人麿〕	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372
〔俊成卿女集〕	177	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181
〔人麿〕	354	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366
〔俊成卿女集〕	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188
〔人麿〕	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358
〔俊成卿女集〕	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189
〔人麿〕	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366
〔俊成卿女集〕	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190
〔人麿〕	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368
〔俊成卿女集〕	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191
〔人麿〕	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370
〔俊成卿女集〕	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192
〔人麿〕	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371
〔俊成卿女集〕	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193
〔人麿〕	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372
〔俊成卿女集〕	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194
〔人麿〕	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373
〔俊成卿女集〕	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195
〔人麿〕	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374
〔俊成卿女集〕	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196
〔人麿〕	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375
〔俊成卿女集〕	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197
〔人麿〕	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376
〔俊成卿女集〕	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198
〔人麿〕	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377
〔俊成卿女集〕	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199
〔人麿〕	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378
〔俊成卿女集〕	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200

〔拾遺愚草〕	352	355	360	11	13	15	94	98	108	113	119	124	189	213	348
〔頬政集〕	352	355	360	104	42	123	118	123	125	152	143	153	167	224	208
〔長明集〕	352	355	360	104	42	123	118	123	125	152	143	153	167	224	208
〔正治再度百首〕	344	344	344	104	42	123	118	123	125	152	143	153	167	224	208
〔曾丹集〕	8	47	96	96	99	99	99	99	101	101	101	101	105	105	105
〔散木奇歌集〕	92	248	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171	171
〔為尹千首〕	43	46	196	196	196	196	196	196	196	196	196	196	196	196	196
〔元真集〕	61	97	307	51	225	114	227	246	251	275	342	343	345	345	345
〔古今集〕	89	89	285	285	272	272	272	272	272	272	272	272	272	272	272
〔天徳内裏歌合〕	122	122	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146	146
〔源重之集〕	228	310	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228	228
〔和泉式部集〕	103	229	103	103	103	103	103	103	103	103	103	103	103	103	103
〔堀河百首〕	92	248	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92	92
〔新勅撰集〕	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
〔桜井基佐集〕	154	272	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154	154
〔家持集〕	186	297	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186	186
〔亭子院歌合〕	73	74	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73
〔素性法師集〕	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74	74
〔千載集〕	317	306	317	317	317	317	317	317	317	317	317	317	317	317	317
〔金葉集〕	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318	318
〔兼盛集〕	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306	306
〔拾遺愚草〕	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
〔頬政集〕	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
〔長明集〕	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
〔正治再度百首〕	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2

〔新古今集〕 351 (長明)
 〔続古今集〕 316 (俊成)
 〔玉葉集〕 341 (基忠)
 〔風雅集〕 183 (国房)
 〔出典不詳〕 71 (定円)
 〔集〕 300 332 337 338 1 4 6 12 18 19 22 31 41 53 72 75
 〔記〕 76 91 100 102 155 161 178 188 241 250 255 271 276 280
 〔記〕 76 91 100 102 155 161 178 188 241 250 255 271 276 280
 ちなんみに、この整理の注記をしておくなれば、算用数字は『隆季』収載歌三七〇首に振りに付した一連番号であり、カッコ内の注記は当該歌の作者であることを意味する(個人の家集・定数歌の場合は省略した)。この整理によって、『隆季集』三七〇首のうち、三八首の典拠および作者が明白になつたが、なお整理して部立別出典資料表を作成すれば、次表のごとくなる。

出典資料	春	夏	秋	冬	恋	計
草根集						
宋雅千首	13	13	13	13	13	13
林葉集	13	13	13	13	13	13
肖柏千首	13	13	13	13	13	13
〔源重之集〕	8	9	11			
〔和泉式部集〕	2	3	2	3		
〔堀河百首〕	2	3	2	3		
〔新勅撰集〕	2	3	2	3		
〔桜井基佐集〕	2	3	2	3		
〔家持集〕	2	3	2	3		
〔亭子院歌合〕	2	3	2	3		
〔素性法師集〕	2	3	2	3		
〔千載集〕	2	3	2	3		
〔金葉集〕	2	3	2	3		
〔兼盛集〕	2	3	2	3		
〔拾遺愚草〕	2	3	2	3		
〔頬政集〕	2	3	2	3		
〔長明集〕	2	3	2	3		
〔正治再度百首〕	2	3	2	3		

家持集	1	1	1
古今集			
亭子院歌合	1	1	1
素性集			
兼盛集			
金葉集			
千載集			
新古今集			
統古今集			
玉葉集			
続後拾遺集			
風雅計			
出典不詳			
計			
142	18	1	
102	5	1	
64	6		
37	3	1	1
25			
370	32	1	1

このうち、釈教以下の四首は便宜上冬部に入れた。また、二首、一首の出典資料は『隆季集』の編者が直接参考したものとも思われず、これらの歌を一括収載する類題歌集などから採録された可能性が強いが、これも便宜上参考までに掲げておいた。この表によつて『隆季集』は、円融・花山兩朝頃の成立と考えられる『古今六帖』『曾丹集』などの類題歌集・私家集、源俊頼の最晩年の成立とおぼしき『散木奇歌集』なる私家集、新古今時代前の歌林苑歌人の『林葉集』『頬政集』『長明集』『正治再度百首』などの私家集・定数歌、後鳥羽院時代の『拾遺愚草』『俊成卿女集』、後嵯峨院時代の『宝治二年歌合』などの私家集・歌合、室町中期ごろに成立をみた『為尹千首』『草根集』『宋雅千首』『肖柏千首』などの定数歌・私家集から撰集されていることが知られ、時間的にはかなり広範囲にわたる出典資料をその撰集対象にしていると言えよう。しかし、その出典資料を吟味するに、それらはある程度の共通性をもつ出典資料であつて、そこには『隆季集』の編者の編纂意図が明確にうち出されているように推察される。その『隆季集』の性格などについては後述するとして、とりあえずここには、出典不詳となつてゐる三二首を

列挙して、『隆季集』の全貌の紹介をしておきたいと思う。

(4) あまの戸のあくる日影は三笠山さして来ぬらん春の色みゆ

(たつ春のあした物へまかりてよみ侍りける。一)

(5) をとめ子か袖ふる雪の空晴て天津□より春やきぬらん

(おなしこゝろを。一)

(6) 雪霜にたへてし空も今朝ははや霞先立春やきぬらん

(ふるきながめに。三)

(7) 氷ぬて流れ絶へにし太山川はや立春とつれて来にけり(同・四)

(本ノマ)

(野霞・六)

(9) 山もとをこめてしもこそ朝霞春のあかれば色増りけり

(あしたの霞を。一)

(10) 若菜摘をのゝ雪間を見わたせは目も春やかに朝霞なる

(わかな。一)

(11) 一しほの緑は見えて松風の春としもなきおとさむけき

(マヤ)

(12) かつきゆる岩根をあらふ淡雪のにしこる山の井のみ

(マヤ)

(13) 立こむる霞をこめて谷川のひゝきに消るうくひすの声

(淡雪・一二)

(14) 春の色も見えぬ難の吳竹に花まつ程に鶯の鳴

(梅に鶯鳴けるを。四一)

(15) 道のへの梅か香匂ふ夕風にまた見ぬかたの盛をそ見る

(梅香・五三)

(16) 河柳もくすをえたに置とめて岩越水の程そしらるゝ

(川柳・七二)

- (17) 下崩のふる木の柳下もえて煙物うき春の色かな
(古木柳・七五)
- (18) あさあけの山桜戸の玉柳たれまつ花の友となるらん (七六)
- (19) 早暁のもえ出ぬらん春のゝに焼原あさる人しけくみゆ
(わらひ・九一)
- (20) 桜花をちのさとまで詠らんあたにをらすな春の山寺
(桜を見る) とるを・一〇〇)
- (21) たすね見花の所もかはりけり身は徒の詠せしまに
(おなし心を・一〇一)
- (22) 世にふれはしとろに見ゆる山賤のおとろのかみも藝かけたり
(葵・一五五)
- (23) 隠れ治の底におふれる菖蒲草こめにひなてみる人は見つ
(あやめ・一六一)
- (24) うち羽ふき今そ鳴なる時鳥卯の花月夜さかりなる比
(おなし・一七八)
- (25) たれしかも初音聞らん郭公またぬ山路にこゝろつくまで
(杜鵑・一八八)

三

- (26) 夏も猶雪けの末の水ならはよちの河こそ冬こゝもすれ
(水辺納涼・一四一)
- (27) 七日ひのはやくれならん久かたの天の川霧立わたるべて
(七夕・一五〇)
- (28) はかなさもよしや思ほし山さとのすゝのまかきの露の槿
(あさかほ・一五五)
- (29) 若なくと人にはつけそ小萩原分つゝ来てもつらきあはすて

(萩・二七一)

正徹 52首、俊惠 44首、宋雅 40首、肖柏 38首、俊成女

30) 秋ながら落葉もしらぬ松虫の声うつもれる野への初霜
(おなし・一七六)

- (31) 玉桺のそら引かへす心ちして雲のあなたになのる鷹金
(鷹の声遠くきく・一八〇)
- (32) 故郷に来てかへるへき秋や猶紅葉の錦秋やそふらん
(紅葉・二〇〇)

(33) 雪すかる籬の竹のおとのみそとく我をおとろかしける
(間居雪・二二二二二)

(34) したにこそへの庵はさしつるに思はぬよはの雪のうはふき
(野宿雪・二二二七)

(35) あらし降る神のしるしの神葉に雪のしらゆふかけそへてけり
(雪中神樂・三三八)

以上の三二首が『隆季集』収載歌のうちの出典不詳歌だが、この出典不詳歌には作者注記のない点が惜しまれるとほいえ、新出歌の可能性は多分にあろう。

さて、『隆季集』の収載歌の典拠調査によつて、三七〇首中の三八首の出典が明白になり、この数値は全体の九一ペーセントに相当するので、ここで『隆季集』の性格に一言しておきたいと思う。『隆季集』が特定の歌人の私家集および定教歌などによつて撰集されてゐることはすでに言及したとおりだが、ここで『隆季集』収載歌の出典調査によつて明白になつた三三八首の作者について整理すれば、次のとくなる。

30首、長明 22首、定家・作者不記 15首、頬政 13首、好忠

8首、躬恒・俊頤 5首、貫之・為尹 4首、元真 3首、素

性・兼盛・重之・和泉式部・匡房・頬季・蓮性・基佐 2首、

人磨・家持・是則・中務・醍醐天皇・寄香・深養父・忠峯・定

方・道真・敏行・道因・俊成・為氏・越前・下野・師継・小宰

相・少将内侍・通忠・有教・基忠・定円・読人不知 1首。

すなわち、『隆季集』の編者は、まず、正徹・宋雅・肖柏などの

室町中期歌壇の実質の指導者の詠を中心核にし、次いで、俊惠・長明

・頬政などの歌林苑歌人の詠と俊成・定家などの新古今歌人の詠

を添加、さらに、貫之・躬恒などの古今時代の詠も付加して撰集し

ている実態を、ここに知り得よう。したがって、これらの各時代を

画する時期の著名歌人の歌はいかなる性格のものであるかを検討す

るに、まず注目されるのが『為尹千首』『宋雅千首』『肖柏千首』な

どの千首歌が『隆季集』の主要部分を占めている事実である。とこ

ろで、これらの千首は千首歌のモデルとも称される『為家千首』

と同題で詠まれているので、『隆季集』がこれら題詠歌の最大級の

歌書から採歌しているということは、『隆季集』の編者が題詠歌の

手本となるべき歌で編纂した、いわば題詠歌の手引書のごとき撰

集を編もうとした編纂意図を示唆していよう。この点は、『俊成卿

女集』からの採歌が『洞院撰政家百首』を中心として『北山五十首』

・『千五百番歌合』・『衛門督殿への百首』などの題詠歌で占められ、『拾

遺愚草』からの抄出歌が『閑居百首』・『閑白左大臣家百首』などの

題詠歌であることや、『林葉集』・『頬政集』・『長明集』・『正治再度百首』

からの採録歌もすべて題詠歌群からの抄出であることから確認され

よう。そしてまた、『草根集』からの正徹の詠もすべて題詠歌だが、

15首、頬政 13首、好忠

8首、躬恒・俊頤 5首、貫之・為尹 4首、元真 3首、素

性・兼盛・重之・和泉式部・匡房・頬季・蓮性・基佐 2首、

人磨・家持・是則・中務・醍醐天皇・寄香・深養父・忠峯・定

方・道真・敏行・道因・俊成・為氏・越前・下野・師継・小宰

相・少将内侍・通忠・有教・基忠・定円・読人不知 1首。

すなわち、『隆季集』の編者は、まず、正徹・宋雅・肖柏などの

室町中期歌壇の実質の指導者の詠を中心核にし、次いで、俊惠・長明

・頬政などの歌林苑歌人の詠と俊成・定家などの新古今歌人の詠

を添加、さらに、貫之・躬恒などの古今時代の詠も付加して撰集し

ている実態を、ここに知り得よう。したがって、これらの各時代を

画する時期の著名歌人の歌はいかなる性格のものであるかを検討す

るに、まず注目されるのが『為尹千首』『宋雅千首』『肖柏千首』な

どの千首歌が『隆季集』の主要部分を占めている事実である。とこ

ろで、これらの千首は千首歌のモデルとも称される『為家千首』

と同題で詠まれているので、『隆季集』がこれら題詠歌の最大級の

歌書から採歌しているということは、『隆季集』の編者が題詠歌の

手本となるべき歌で編纂した、いわば題詠歌の手引書のごとき撰

集を編もうとした編纂意図を示唆していよう。この点は、『俊成卿

女集』からの採歌が『洞院撰政家百首』を中心として『北山五十首』

・『千五百番歌合』・『衛門督殿への百首』などの題詠歌で占められ、『拾

遺愚草』からの抄出歌が『閑居百首』・『閑白左大臣家百首』などの

題詠歌であることや、『林葉集』・『頬政集』・『長明集』・『正治再度百首』

からの採録歌もすべて題詠歌群からの抄出であることから確認され

よう。そしてまた、『草根集』からの正徹の詠もすべて題詠歌だが、

『隆季集』の依拠したのは日次系『草根集』なのか、類題系『草根集』

なのか、いずれの系統なのであるうか。この点を明らかめるために、

『隆季集』の「冬」部の次の七首を吟味してみよう。

(36) しぐれには思ひそ出ぬ白露にあらそひ置しねやのあふきを

(37) まぐらかのこからし吹て窓うつや渡らぬ浪のしぐれ成らん

(38) 草も木も霜のからすといへる名のなきをつれたる松の色哉

(39) さすか猶ゆくとし積る霜の松下葉色放散る嵐かな

(40) 木の間もる日影にさへてさゝの葉の太山は霜に疊色哉

(41) 日影さす軒端の霜のまたきよりたかぬあさけを立るさと人

(42) 山川や朽て跡なき橋けたに絶／＼かゝる冬のあさかせ

(43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

(40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49)

二〇七・五一一一（ノートルダム清心女子大学国文学研究室至古典叢書刊行会編『草根集二』の歌番号による）のことく整然としているのに、日次系統では、一〇四〇一・四一六一・七七六〇・一〇〇二八・九六五・一六二・八二九三（『私家集大成』所収の書陵部藏『草根集』）（五二〇・二八）の歌番号による）のとおりアト・ランダムである。この点から、『隆季集』が正徴の歌を採録する際に依拠した『草根集』はおそらく、類題系であつたろうと推察されよう。そして、『隆季集』が類題系『草根集』に依拠していることは、『隆季集』に類題歌集『古今六帖』からの採歌があることと関連するが、同時に、『隆季集』の収載歌がほぼ題詠歌で独占されているという性格を確認するであろう。

ところで、これらの題詠歌の手本ともなるべき歌はほぼ原拠資料に付された歌題下に配置されて、『隆季集』の編者の手は加わってない感じがするが、『宝治二年歌合』からの次の春部の

（5）雲の上の山も木高き桜花みよのさかりの春にあふらん

（芳野・花を・九六）

（6）みよしの・高木の山の桜花空より外ににはふいろいろかな

（亂花といふことを・九九）

（7）尋ねる花より花に日敷経て山路の末にいくよとまりぬ

（花を尋るこ・るき・一〇一）

の三首をみると、いずれも同歌合では『山桜』の歌題が付いているのに、『隆季集』では注記のごとき歌題が付いている。この原拠資料と『隆季集』との歌題の異同は、『隆季集』が注記のごとき歌題（詞書）を付した類題歌集から採歌した可能性も推定されなくはないが、目下、そのような歌書は見出しえず、ここは『隆季集』の編

者が例歌にもつとも即するように歌題を改訂した結果と考慮するのが妥当ではあるまいか。というのは、『俊成卿女集』の「洞院撰政家百首」からの抄出歌である、すでに引用した（1）の歌の歌題が、原拠資料では「霞」であるのに、『隆季集』では「浦のかすみを」となつていて、そこに編者の賢しら（改訂）が認められるような事例が他にいくつか指摘されるからである。ここに、『隆季集』の編者の、基本的に手本とすべき例歌および歌題はそのままの形で転載するけれども、例歌により適切な歌題表記が可能な場合は、あえて原歌題を改訂するという収載方針を見出すことができよう。その意味で、『隆季集』の収載歌および歌題には、編者の好尚の反映がいくらかみられるといえようか。

かよう、『隆季集』の収載歌は、『古今六帖』からの優雅で知的趣向的な歌、特に新古今以後の歌壇に迎えられて少なからぬ感化を与えた（3）俊恵・頼政・長明などの歌林苑歌人の詠 後嵯峨院歌壇の所産たる『宝治二年歌合』からの二条派流の温雅にして類型的な歌、室町前期の特に応永期に活躍した為尹や宋雅、室町後期の特に明応・永正期の歌壇の実質の担い手であった肖柏などの、平明にして典型的な古典情趣の歌など、いずれも題詠歌の模範となるような性格の歌がほとんどであるといつていいようななかにあって、二条派流の歌とは趣を異にする正徴や俊成女などの詠が『隆季集』にはかなり収載されているが、この点はいかに考慮されるであろうか。思うに、正徴と俊成女の詠が『隆季集』にかなり収載されているのは、正徴が『正徴物語』で、「恋哥は女房の歌にしみ入りて面白きはおほき也」と指摘して、式子内親王・俊成女・宮内卿の詠を各々引用した後に、「俊成女の、哀れなる心長さのゆくゑともみしよの

夢をたれかさためん 極まる幽玄の哥也」（日本古典文学大系本）と俊成女の恋の歌を評価していることや、また、心敬・宗祇らの連歌師に混じて正徹の言説を多く引用して、和歌・連歌の作法等に関する雑談を集めた『兼載雑談』に、恋の歌の手本として、「下もえにおもひきえなむ煙だにあとなき雲のはてそかなしき 俊成女これらを恋の本と被申き」（日本歌学大系本）と俊成女の歌が賞揚されていていることから明白なように、『隆季集』の編者は両者の歌を同系統のものと解していたからであろう。ところで、この両者の歌も、歌題をいかに詠みおおせるかという参考歌としての観点に立つならば、題詠歌の恰好の材料たり得ることは言を待つまい。ここには、『隆季集』の編者的好尚の反映があることは、いうまでもなかろうが、同時に、『隆季集』の成立時期の時代的好尚の反映もあるように思われる。

要するに、『隆季集』は編者的好尚とその時代性を反映した、題詠歌を詠むうえで模範たり得るような「古」「今」の歌で撰集された詞華集であるといえるであろう。

四

それでは、『隆季集』の成立時期はいつであろうか。この問題に示唆を与えるのは、すでに言及した「右隆季集右京亮量胤之本全／備用写留者也／于時明応二年林鐘中旬／尚保在判」なる奥書で、明応二年（一四九三）六月中旬に、右京亮量胤の所持する『隆季集』を、尚保が書写した由である。しかし、量胤も尚保も、管見の範囲ではその生没年も伝記的事績もまったく不明であるので、奥書の記事に信憑性があるのか否か判断がつきかねる。そこで、『隆季集』の

内部徵証としてその成立時期を示唆する事例を探求するに、『草根集』『肖柏千首』『桜井基佐集』からの抄出歌を『隆季集』が収載しているという事実に着目する。すなわち、これら三作品の成立時期が判明すれば、『隆季集』の成立時期の上限はそれより以降ということになる。

まず、『基佐集』からの抄出歌は

（46）神わざのたえぬみあれに葵草いくよかけても色はかはらし

（47）かひかねにいよふ月ののほるまで旅ねくるしきさよの中山

（鎌・二九七）

の二首で、島原松平文庫本『基佐集』（『私家集大成⁶』所収）によれば、（46）は「よしかたの入道」（即ち基佐の詠だが、即ち三・四句が「ふくるまでいねもやられぬ」とある点で多少の疑問が生じなくもないが、『基佐集』収載歌と判断して差し支えなかろう。その『基佐集』の成立時期については、久曾神昇氏が「詞書、ことに他人の歌の詞書などを見るに、……晩年になって、詠草書留などを資料として整理したものであろう」とされるのに対し、稻田利徳氏は「晩年の成立かいなかは、まだ確定できない」と判断を保留されているように、いまだ決定をみていない。そこで、桜井基佐の生没年だが、いずれも未詳とはい、稻田氏によれば、「文明・明応・永正のころに活躍した」由であるから、『隆季集』の奥書の明応二年は一応信ずるに足る記事と判断してよからう。

次に、『肖柏千首』の成立時期だが、これについては、

（48）夕暮のおなし乱を秋の風露にまかせよ野辺のかるかや

（丸）丸

（明治）のみなどるぬも宿をかるかやの跡まで風は吹乱るらん

（おなし・一六二）

の二首が、（綱）が肖柏、（綱）が宋雅の詠で、『詠千首和哥上 宗雅 牡丹花』（内閣文庫本二〇一・四八四）に「刈草乱風」の歌題下に収載があるので、いわゆる『宋雅肖柏千首』の成立時期を問題にすればよい。この『宋雅肖柏千首』の成立時期については、同書の巻末に、『宋雅千首』のものとおぼしき「応永廿二年十月日」なる記事と、「文明元年初秋漢羽林郎将藤原為広」なる記事（実は、これは為尹の奥書）に統いて、「大永七年丁亥十一月十四日」（書陵部本の奥書には、統けて「九州肥後住人水俣瑞光書之」とある由）の記事があつて、大永七年の記事が示唆を与えるよう。しかし、井上氏によれば、「大永の奥書が両千首にかかるとすれば已に両千首は合せられていた訳だが、そう簡単にも断ぜられまい。」といふことで、『宋雅肖柏千首』の成立時期は現在のところ分明でないといわねばなるまい。ところで、牡丹花肖柏は嘉吉三年（一四四三）生誕、大永七年（一五二七）没の歌人・連歌師であるので、『隆季集』の奥書に記す明応二年は肖柏五十歳に当たるので、『隆季集』の奥書の記事には大いに信憑性があると判断されよう。

最後に、類題系『草根集』の成立時期だが、現存諸本では、野坂元定氏本『草根集』の奥書に「永正三年曆月日」、京大付属図書館本『草根集』の奥書に「于時永正二年從孟夏至初冬漸書之早」と記す記事がもつとも古く、稻田利徳氏によれば、その成立は「少なくとも室町末期には成立していた。」由であるが、その正確な成立時期は現在のところ確定していない。ところで、類題系『草根集』は日次系『草根集』に依拠して成ったはずで、松下正広が日次系『草

根集』を編んで、一条兼良に序を要請したのが文明五年であるから、類題系『草根集』が『隆季集』の奥書記事の明応二年ごろに編纂された可能性は充分あるであろう。ここにも、『隆季集』の奥書記事は信憑性を有すると判断されよう。

以上の『桜井基佐集』『肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の検討から、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月といふ記事は信するに足る内容であることが判明した。したがって、『隆季集』の成立時期の上限は少なくとも明応二年六月中旬以降と推定してほぼ誤りはないといえよう。となると、この時期は、文明後期歌壇の最高指導者で、三条西実隆・姉小路基綱などの公家や地方大名の歌道師範となって活躍していた飛鳥井雅親が没した直後ではあつたが、作歌活動は活発で、宫廷では歌学研究も盛んに行われて、『風雅集』から『新続古今集』歌の類句集たる『新編和歌類句』（延徳二年成立）や、万葉歌の事項索引ともいべき『万葉類葉集』（延徳三年成立）などの作歌手引書も生まれる一方、連歌の方面でも、宗祇を中心にして肖柏・宗長等が活躍、「連秘抄」（長享三年成立）や『下草』（明応二年成立）『新撰菟葵波集』（明応四年成立）などの作品が生まれているので、『隆季集』もこうした歌壇の趨勢や時代を背景にしての所産と考慮すれば、その性格、存在意義も理解されよう。すなわち、「古」「今」の題詠歌の手本ともなるべきような詠歌で撰集されている『隆季集』の存在意義は、その成立時期における作歌の規範となるべき題詠歌の詞華集を編纂・提供しようと企図した編者の実践結果にあつたといふことができるのではないか。その編者には、肖柏・基佐など連歌に関わる人物の詠歌を収載していることなどから、連歌と関わる歌人などが想定されようが、具体的人物

となると、且下のところ、確証が得られないでの、編者の問題は今後の課題にせざるを得ない。また、『隆季集』なる集名も巻頭歌の詠歌作者が不詳のため、これまた、何故にかかる集名となつたのか分明でない。

なお、『隆季集』の奥書に記す明応二年六月中旬なる記事は、現在その成立時期が分明でない、『桜井基佐集』『宋雅肖柏千首』類題系『草根集』の成立時期の下限を、それぞれ明応二年六月中旬より以前と規定する意味で、『隆季集』のこれらの作品の成立時期の問題を究明するうえで果たす役割は計り知れないものがあるといつてよからう。この点、『隆季集』の内容そのもの有する価値とは別個の、いわば派生的価値とでもいべき性格のものであるうが、『隆季集』の価値を側面から高める貴重な要素になつてることには相違なかろう。

注

- (1) これは『古今六帖』収載歌で、作者注記のない歌数で、具体的には、『隆季集』の収載歌の典拠および作者の整理のところで歌番号を指摘しておいた。
- (2) 「為家千首」とはいっても、藤原為家がみずから出題した「前大納言為家卿中院亭会千首」のことと、慶安三年版『明題部類抄』には、当該歌題が掲載されている。
- (3) 『和歌文学大辞典』の「俊惠」の項（田中裕先生執筆）。
- (4) 『群書解題第九』（昭和35・11）の「桜井基佐集」の項。
- (5) 稲田氏「桜井基佐の作品における俳諧的表現」（連歌俳諧研究）第40号、昭和46・3。
- (6) 注5に同じ。
- (7) 井上宗雄氏『中世歌壇史研究の室町後期』（昭和47・12）の一〇六頁。

(8) 稲田利徳氏『正徹の研究』（昭和53・3）の五四三頁。
〔付記〕 本稿を草するに際して、貴重な御蔵の『隆季集』写本一冊を貸与してくださった、井上宗雄氏に深謝申しあげる。なお、本稿の概要の一部は和歌文学会第二十八回大会（昭和57年10月10日、於共立女子大学）で発表したが、その際御示教賜った、井上氏をはじめ 福田秀一・島津忠夫・鶴嶺裕雄の諸氏にも御礼申しあげる。ちなみに、本書は「花園大学研究紀要」第十四号（昭和58・3）に翻刻したので、御参考賜りたく思う。